

発 明 文 化 論

〈第 58 回〉

丸山 亮

音のエコロジー

8月の末、音の環境と人間のよりよい関係をさぐる世界音響エコロジー会議に参加した。場所はスイス・アルプスの谷あいにあるヴァレ州の村、サイヨンを中心に移動する。宿の裏手の斜面をぶどう畑が覆い、少し遠くに雪を頂いた山も見える。会議には音楽家、音と関係の深い建築家、美術家、社会学者などが地元スイスをはじめアジアや南北米の世界各地から集まって、講演とツアーの間にコンサートを含むさまざまなプログラムを繰り広げた。

音響エコロジーというのは、音の風景を論じるサウンドスケープの概念に近いが、明確な定義があるわけではない。講演や発表もそれだけ多彩となった。

一行は地元出身の作曲家で友人のピエール・マリエタンに導かれ、ダン・デュ・ミディの高峰が見下ろすラバルマの高地で、放牧の牛がカウベルを鳴らして通り過ぎるのを聞く。そして少し下ったヴァル・ディリエの村では、狭い谷向こうの緑の山肌に配されたアルペンホルンのはるかな響きに耳をすませた。私はここで、マリエタンの求めにより教会の鐘の音を鳴らす役を引き受ける。15分ごとの定時に自動で鳴る鐘の2音に、いくつかの音を余韻のように即興で加えてみた。それを引き継いで声楽家ブリギッテ・シルトネヒトさんが鐘楼から朗々とした声で歌い出す。全体が壮大な空間に広がる「土地の音楽」を構成していく。

さらに谷底のモンテーの町に下り、中心の噴水を囲んで、水音や人のにぎわいに耳を傾ける。それから山裾の傾斜地に建つマレヴォー精神病院を訪れた。病院の社会文化担当者で社会学者でもあるガブリエル・ベンデル氏に、ここは開放的な病院で町のざわめきが患者によく聞こえる立地なので、社会とのつながりを確認する効果があるという話を聞く。

講演では日本から参加した建築家、竹山聖氏が、近く都内に建築する仏教寺院の空の間と呼ばれる部屋が音をどう考慮しているかを語り、また、音楽学者、椎名亮輔氏は、日本文学の伝統に現れた音の記述を説明した。中国の建築家ザン・ユー氏は、18世紀の中ごろ清朝の乾隆帝が自ら詠んだ詩の中に現れる琴を形象化したという北京の庭園の、象徴的な意図を語る。

パリとニューヨークに在住する二人の女性音楽家アンドレア・コーエンさんとヴィスカ・ラドキエヴィチさんによる提案は楽しい。参加者に呼び掛けて気に入った音風景の録音を届けてもらい、それをコラボした音の作品「風景」を一緒に作りたいという。私は炎天下で録音した日本の蝉の声を提供した。世界各地からこうして集まった音がどのようにブレンドされるか、楽しみにしている。

サイヨンの集会所メゾン・ステラを会場にしたコンサート。私はここで、自ら撮影し、編集した海岸の波に始まり満月の夜の光景に終わる映像に、波音や、ゆっくりしたハーモニカの音などの録音を加え、さらに生の音をその場で重ねながら映像と対話するパフォーマンス「記憶の断章」を行った。強い拍手で迎えられ、カーテンコールが続いたのがうれしかった。

ところで、風光明媚なスイスも電力の確保には苦勞するようで、風力発電の大きな風車が谷あいのあちこちに建ち始めている。これがやはり騒音や景観破壊の問題を引き起こしているようだ。スイス景観保護財団のローマン・ハプカ氏は報告の中で、その立地には慎重な検討がなされるべきだと述べている。

一方、音を都市計画の中で積極的に考慮しようという提案もあった。フランスの建築家カテリーヌ・アヴァンタンさんは、シャロン・シュル・ソーヌの地で住民と計画者が話しあいながら進めているプロジェクトについて語った。土地と音との関係性、音の素材、住民の聴取性向、これらに基づいて音の庭園などが構想されているようだ。音響エコロジーとは、結局、聴取の態度を考慮しながら、人と環境が共存する関係を築いていく方法の模索に行きつくだろう。

(まるやま りょう 共生国際特許事務弁理士)